

Hominisation¹⁾ のもつ意味一序にかえて

江 原 昭 善 (京大・霊長研)

一般に生物学者・人類学者が、Hominisation という場合、個体発生的な、受精卵からヒトになる (Menschwerdung) 過程は、ほとんど意味せず、もっぱら系統発生的に、「サルからヒト」へ、あるいは人類という上位分類群の中で、「猿人類から原人類・旧人類を経て新人類へと進化」したことを意味する。

かかる意味の表現は、いままでなかったわけではなく、たとえば E. Haeckel (1874) は、Anthropogenese なる語を用いており、また v. Eickstedt (1934) は、Homination なる用語を提案している。ところが、理由は明らかでないが、最近、これらの語に代って、Hominisation という表現が、次第に多く研究者の間で使用されるようになった。

ところで、Hominisation という表現で、われわれは、ヒトの由来や起源・系統の解明だけを目論んでいるわけではない。いかにしてサルからヒトへ、そしてまた、*Homo sapiens* になり得たか、その要因論・成因論まで含んでいるのである。

以上述べたことから、すでに察せられるように、Hominisation は、まず二つの意味をもつことがわかる。そのひとつは、サルからヒトへ、つまり Hominidae 出現にいたる純生物学的次元の問題であり、さらに具体的にいえば、Hominidae を他の分類群と区別する基本的特徴である、直立二足歩行性とその生活型の、起源・系統・要因等を論ずるものである。

他のもうひとつは、Hominidae 内で系統論も含めて、いかにして文化をもち、精神活動を営む *Homo sapiens* が出現したかということである。人類は自然界で生きてゆく過程で、道具の有用性を発見し、技術を習得し、言語を発展させた。その結果、人類はもはや単なる自然淘汰や自然環境への適応といった physical な、身体的レベルだけで、生物学的諸法則に支配される一生物群とは、質的に異なる文化的存在となった。

19世紀の頃は、まだ人類起源を論ずるのに、全人的な把握がなされていた。それが20世紀に入ると、次第に生物学的側面からのアプローチに偏って行った。その結果、ヒトを必要以上に動物化する傾向さえみられるようになった (Portmann, 1947~1957)。おそらく、その理由として、生物学は20世紀に入って、方法論的にも長足の進歩を遂げたこともあるだろう。しかし、なんといっても「ヒトは明らかにある種のサルから進化したわけだし、現に類人猿とは解剖学的・生理学的に緊密な類縁関係にある。そしてヒトのあらゆる現象は、それらの身体的下部構造があって、はじめて具現するものである」という、きわめて単純な一元論が作用していることも、否定できない。

すでに述べたように、文化的な、あるいは文化的になりつつある存在としての、Hominisation は、もはや生

物学的法則だけでは完結し得ない性質を必然的に内蔵していることになる。それは、道具の発見と発達、言語の発生と発展、つまり文化の起源を避けて通ることができないということの意味する。だから、Hominisation は生物と文化という二元の問題をかかえているわけだが、それにも拘らず、多くの起源論を吟味するとき、残念ながらあえて一元化して説明しようとする論理的な無理を侵すか、未説明の他の用語に問題をすりかえて、片付けていることが、きわめて多い。ここに Hominisation の今後の課題のひとつをみることができる。

問題はまだある。同じ道具製作・使用ないし言語・思考活動について、質的に異なる二段階が想定されることである。猿人類ないし原人類の段階では、道具の製作・使用は、かなり即物的で、観念的に定型化されておらず、使いよさとか利便さは考慮外だったことが、その石器の性質から、よみとることができる。

旧人類になると、道具は各々定型化すると同時に、いちじるしく豊富になった。彼等は積極的に、集団で大型獲物を狙いもしたし、分業のあともみられる。その意味するところは、彼等は自己の分業的・役割的行動を、使用した道具とともに、観念化・定型化し、同時に音声によりシンボル化していたことであろう。つまり彼等は言語活動を行っていたのであり、それは、大脳の発達や音声器官の復元からみても、矛盾はない (Lieberman, 1971)。

文化に、物質的・技術的文化と、精神的・価値的文化が区別できるように、言語にも即物的思考・体験的観念の機能と、演繹的・理解的思考機能が区別され、旧人類では、先史学的遺物や、民族学的資料から推して、まだ前者の段階に留まったと考えられる。たとえば、「彼も死んだ。彼女も死んだ」ということは、体験的観念として知ることができたとしても「自分も同じ人間だから、早晚死ぬだろう。人間は死ぬものだ」という演繹的な思考の域には達していなかったと思われる。

physical には、旧人類から新人類にかけて、ほとんど本質的な進化がみられないのに対して、技術的・文化的には、瞳みすべき発展を遂げており、この事実、次のことを物語る。

つまり、進化は、生物レベルでは、自然界における適応能力完成の歴史であった。ところがいまや、文化は、ヒトと自然を遠ざけ、間接化し、道具はあたかも手の延長に位置する生物学的器官に似て、旧人類段階以降は、進化は主として、技術的能力と精神文化レベルの向上の歴史となったといえよう。

以上のような観点から、人類の進化を、自然界における他の一般生物と区別して、とくに Hominisation としてとらえることは、まさに当を得ている。このような見解が、もし生物学・人類学の範囲から逸脱するというならば、Hominisation はまさに、人類学者・生物学者だけでは完結し得ないひろがりをもった問題であるということになる。

¹⁾ 英語では hominization と綴る。